The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日英オノマトペの考察 : 日英擬音語・擬態語の全体像を概観する
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2016, 14, p. 23-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56957
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日英オノマトペの考察
― 日英擬音語・擬態語の全体像を概観する ―
A Comparative Study of Japanese and English Onomatopoeia

小倉　慶郎

【要旨】

筆者が担当する日→英翻訳の授業で一番説明に困るのは、オノマトペの翻訳である。日英オノマトペについてはわからないことが多い。「日本語にはオノマトペが豊富に存在し、欧米語の３－５倍存在している」という意見が存在する一方、「英語のオノマトペは日本語に負けないくらい豊富である」という意見も存在する。日本語のオノマトペは副詞＋動詞、英語のオノマトペは様態動詞一語で表現されるのが一般的であるが、多くの疑問が横たわっている。日本語には英語型のオノマトペはないのか、英語には日本語型のオノマトペはないのか。また日本語のオノマトペが多い理由は、日本語の動詞が少ないからという論者もいるが、それはなぜなのか。こうした数多くの疑問を解くために、筆者は今まで一貫して用いてきた「文化の共通基盤を探る」というスタイルで問題点を整理してみた。その結果、従来の定義を見直し、オノマトペを２つのタイプに分類すると、より合理的な説明ができることが判明した。

はじめに

筆者の日→英翻訳の授業では、文学作品も扱うので、日本語のオノマトペ（擬音語、擬態語）の英訳の仕方を説明しなければならないことがある。

「雨がしとしと降っている」の「しとしと」が典型的なオノマトペだ。日本語では、「しとしと」という副詞と一般動詞「降る」を組み合わせて表現するが、英語では様態動詞一語で表現することが多い。たとえば、この日本文はdrizzle（=rain lightly）を使って、“It is drizzling.”と表現することができる。もちろん“Rain is falling lightly.”とかdrizzleの名詞形を使って“There is drizzle.”と言うこともできる。

などと説明することが多い。日本語のオノマトペについてあまり知らない留学生は「まあ、そうかな」という面持ちで聞いている。「こうしたオノマトペは、英語よりも日本語には豊富にあると言われている……」などと説明することもあるが、興味を示す学生もあり、あまり興味を示さない学生もいる。授業で日英オノマトペを説明するたびに、筆者の経験と断片的な知識を持ち出すだけで、両言語におけるオノマトペの体系的な比較ができない、一貫した説明ができないもどかしさが残る。そのもどかしさを解消しようと思ったのが本稿の執筆動機である。

また、パルバース氏の発言も心に引っかかっていた。

パルバース氏とは、宮沢賢治の英訳などで有名なロジャー・パルバース（Roger Pulvers）のことである。パルバース氏は、ニューヨーク生まれだがオーストラリア国籍を取得。今まで英語、日本語で45冊以上の著作をあらわし、作家、翻訳家、劇作家、演出家として著名である。パルバース氏は言語学者ではないが、氏ほど言語作品の創作現場に通じ、日本語、英語に熟達した人はまずいないといっていいだろう（氏は英語、ロシア語、ポーランド、日本語を話すマ

ルチリンガルでもある)。数年前、そのパルバース氏が学習院大学で宮沢賢治についての講演を行ったことがある。その後、控室で雑談する機会があった。その時、「なぜ日本人は日本語のオノマトペが豊富だと強調するんだろう。実際には、英語の方がオノマトペが多いんだよ」と言われたことが印象に残っている。著書『驚くべき日本語』の中でもパルバース氏は次のように述べている。

……英語にもまた、日本語に負けないぐらい豊かな擬声語や擬態語などがあります。(p.101)

これは、日本語の方が英語よりもはるかに多くのオノマトペを持つと考えている、日本人の常識とは全く逆である。本稿では、このパルバース氏の発言が何に基づいているのかを探ることから、オノマトペの新たな分類法を提唱する。それが日英両語のオノマトペの全体像を客観的に説明する手がかりとなると考えるからだ。

日英両語のオノマトペのさまざまな問題点を外国人留学生への説明という観点から整理しながら、パルバース発言の真意を探ってみたい。

1．日英のオノマトペの定義がずれていること

まず日本語のオノマトペとはなにか、その定義を見てみたい。一般的にオノマトペといえば、擬音語（擬声語を含む）と擬態語の総称として使われるのが普通である。山口仲美（2003）は次のように定義している。

擬音語というのは、現実の世界の物音や声を私たちの発音で写しとった言葉です。たとえば、「ほーほけきょー」「がたがた」。擬態語と言うのは、現実世界の状態を私たちの発音でいかにもそれらしく写しとった言葉です。たとえば、「べったり」「きらきら」。(p.1)

つまり実際に存在する音を言語化したものが「擬音語」で、音は存在しないが、それらしい状態を言語化したのが「擬態語」である。さらに、山口は日本語におけるオノマトペの位置を次のように説明する。

……擬音語・擬態語は、日本語に豊富に存在し、日本語を特色づける言葉なのです。分量から言っても、欧米語や中国語の 3 倍から 5 倍も存在しています[1)]。(同上)

以上の定義は、オノマトペについて知識のある日本語教育者なら自明のことであり、もはや議論の余地が無いことと考えるかもしれない。

では英語のonomatopoeiaの定義を見てみよう。呂（2004）が的確に定義を述べている。

英語のオノマトペ（onomatopoeia）とは、ギリシア語で音と指示対象の連結で形成される言葉ということから示唆するように、擬音が基本的な意味であり、事態との間にメトニミー・リンク（近接性）が介在している。擬態語などはmimetic wordsとされ、音がないため抽象度のより高い、慣習化された有縁性が関与している。(傍線筆者)(p.99)

mimeticは日常使われる単語ではないから、念のため*Oxford Advanced Learner's Dictionary*で意味を確認してみよう。

copying the behaviour or appearance of sb/sth else
人や物の行動（動き）あるいは外見を模倣する

つまり、mimetic wordsといえば擬態語のことになる。
次に、*Concise Oxford Dictionary*でonomatopoeiaの定義を見てみたい。

The formation of a word from a sound associated with what is named（e.g. *cuckoo,sizzle*）.
名づけられたもの（＝指示対象）に関連した音から単語を形成すること（例：cuckoo, sizzle)。

やはり、英語のオノマトペには擬態語は含まれないのが普通なのだ。日本語の「オノマトペ」は、英語のonomatopoeiaとmimetic wordsの両方を指す。だからきちんと最初に定義を説明し、両言語では定義に違いがあることを明確にしないと誤解が生じる可能性がある。（結局、オノマトペという単語で擬音語・擬態語の両方を指すことに無理があるように思うが、ここでは慣例に従いオノマトペ＝擬音語・擬態語として話を進める。なお英語では、onomatopoeia（擬音語）とmimetic words（擬態語）の両方を指す語句としてimitative wordsがある。）
例えば、日本語のオノマトペと英語のオノマトペの数を比較している研究を見ても、詳細なデータを明らかにしなければ、日本語に関しては擬音語、擬態語の両方を数え、英語は擬音語だけを数えているのではないか、という疑念が出てくるかもしれない。
本センターの授業で日本語のオノマトペに言及するときには、日英両語の定義の違いをきちんと説明するか、「擬音語、擬態語」あるいはonomatopoeia and mimetic wordsと明確に言った方が、留学生に対する誤解が避けられるだろう。

２．日英のオノマトペを２タイプに分類する

日英のオノマトペの表現形式をまず整理したい。呂（2004）は次のように述べている。

日本語の「オノマトペ＋動詞」という形式は擬音も擬態も可能だが、英語においては「様態動詞」一つで表現することが多い。（p.112）

（ただし、Inose（2008）によれば日本語の擬態語の一部は「する」をつけて動詞（verb）化することもある。例：頭がガンガンする。また「な、に、の、だ」をつけて形容詞（adjective）化することもできる。例：サラサラな髪、髪がサラサラだ。）ここで『日英擬音・擬態語活用辞典』から日英のオノマトペの典型的な例をひとつだけ挙げよう。

<u>ばたり</u>と本を<u>閉じて</u>、子どもたちをどなりつけた。
He <u>slammed</u> the book shut and yelled at the children.（p.257）

では、これから日英両語の共通基盤に目を向けて考察を行っていきたいと思う。筆者が本センターで教えてきて、逆に留学生から教えられたことは数多い。特に勉強になったのは、世界中を見渡して、日本文化だけの特別な現象というのはほとんど存在しないということである。また授業で日本の特異性を主張すると、真剣に学んでいる留学生ほど、不快感をあらわにしたり、反論してくる場合が多い。この経験から、今までも『授業研究』に筆者が投稿する場合、常に文化間の共通基盤に着目してきた。実際、二つの文化間で全く異なる現象が起きているように見えても、共通点に目を向けると同種のものが存在することが多いのである。

最初にパルバース氏の冒頭発言の謎解きをしたい。

パルバース（2014）は、まず次の 8 語を英語の擬音語、擬態語として挙げている（以下はp.106を筆者が整理したもの）。

crash 大きな音を立てて衝突する
bang ドシン [バタン、ドンドン] と打つ
chirp [小鳥、虫が]さえずる
crunch バリバリと砕く
slide（なめらかに）すーっと動く
slick なめらかな、すべすべとした
sleet みぞれ（雨交じりの雪）が降る
glitter ぴかぴか光る、きらきら輝く

さらに日本語の「ひゅうひゅう」というオノマトペは、以下の英語のオノマトペを想起させるという（p.109）。

whistle 風が吹くときの口笛のような音
moan 風が咆哮するような、悲しげな唸り声
swish 鞭が「ひゅっ」となるような跳ねる音
whiz 空中に放たれた矢が飛んでいくときの空気を切り裂くときの音

次に水を表現する時の英語のオノマトペとして 2 つの単語を挙げている（p.111）。

slosh パチャパチャはねる
slush ズボズボ音を立てる

*Oxford English Dictionary*で調べると、上記のうちcrash, bang, chirp, whistle, swish, whiz, slosh, slush, crunchは‘imitative’すなわち「擬音語、擬態語」であると記載されている（sloshはslushのvariation）。しかし残りの語すなわちslide, slick, sleet, glitter, moanには‘imitative’の記載がない。

擬音語、擬態語は古代から存在したのは間違いない。文献的な証拠がなければ辞書に記載しないという辞書執筆者、編集者の姿勢は理解できる。しかし文献的に辿れないからといって必

ずしも、擬音語・擬態語起源ではないとは言い切れないのも事実であろう。少なくともパルバース氏はslide, slick, sleet, glitter, moanを擬音語、擬態語として認識しているのである。なぜだろうか？

田守・スコウラップ（1999）は、英語独特の「音象徴」の例として、語頭子音群のfl-, gl-, s-, w-を紹介している。つまり、英語ではこれらの音が語感として擬態を表現することがあるのである[2)]。

fl-は通常、quick movement（素早い動き）を表す。
例:flick（er）, flap, flop, flare, flip, fail, flash, flee, fly, flinch, flit, flog, flagellate, fling, flounce, flush, flutter
gl-はvision/shining（視覚、輝く）を表す。
例：glance, glare, gleam, glimpse, glint, glisten, glitter, glossary, glow
s-は moving along（前へ進む）を表す。
例：sally, sashay, saunter, scamper, scoop, scoot, scrape, scuttle, strut
w-は back and forth quality of movement（前後[左右]に揺れ動く）を表す。
例：waddle, wind, wobble, wamble, wag（gle）, wiggle, weave
（以上、田守・スコウラップ（1999）p.139-145を筆者がまとめたもの）

また、呂（2004）は「英語のオノマトペらしい接辞」として以下のように表にまとめているので紹介したい。

表１　英語のオノマトペらしい接辞

接辞	特徴	例
fl-	速さ	flick, flip, fling, flap
sw-		swing, swat, swipe, swoop
gr-		grumble, groan, grout
-ash	突然の強い打撃	crash, smash, gash, bash
-ump	落下や衝撃	thump, bump, dump, slump
-iggle		giggle, higgle, juggle, niggle, sniggle, squiggle, wiggle, wriggle
-ety		bumpity-bump, clackety-clack, clankety-clank, clappity-clap, clickety-click, clipperty-clip, flippity-flap, flippity-flop, etc.
ker	強調	kerblam, kerblooie, kerchoo, kerchunk, kerflip-kerflop, kerflop, kerplonk, kerplunk, kerpow, kerslam, kerslap,

呂（2004）から引用。

パルバースが例として挙げた、slide, slick, sleet, moanは上記の例には含まれていないが、sl-, m-の接辞がそれぞれ「なめらかな動き」「つぶやき」を意味していると考えられる。このように、英語のオノマトペを、上記で示したような語感でわかるものを含めるとあっというまにその数は膨らむのである[3)]。そしてほとんどあらゆる種類の英語文献にオノマトペが見つけら

れることになるだろう。

ところで日本語には、英語のように様態動詞一語でオノマトペを表現する、ということはないのだろうか？通常オノマトペには分類されないが、実は日本語にもこのような語が存在するのである。『日本国語大辞典』を見ると、日本語の「吹く」の語源として「フー」という擬音語から派生したという説が紹介されている。また「轟く」のトドロはドロドロという音からの派生説を挙げている。さらに「騒ぐ」は擬声語「さわ」の動詞化した語と断定的に説明されている。「吹く」「轟く」「騒ぐ」以外にも、日本語母語話者が意識していないが、擬音語、擬態語から派生した語はまだあるようだ。大野（1974）は古語の「ソソク（躁く）」「トヨク（動く）」「ヒヒク（響く）」「ナヒク（靡く）」を擬音語、擬態語から派生した語として挙げている。

> ……ソソは、ざわめく意。トヨはどよめく意。ヒヒはびりびりする意。ナビは、長い物のもとが押えられていて、先のゆらゆらとする意である。これらは、皆、オノマトペア（擬音語・擬態語）と呼ばれる語で、物事の状態や動作を、人間の音声の組合せから受ける印象によって表現するのである。このオノマトペアに接尾語クを加えて動詞を形成している。（p.69）

さらに大野は「ソソク（注ぐ）」「ユルク（緩く）」「ヱラク（笑く）」「ユラク（揺らく）」「ワララク（笑く）」「ヒヒラク（囀く）」「ササラク（さらさら）」「ワナナク」「ヲノノク」「オドロク（驚く）」「ソゾロク（漫く）」「コロロク（嘶く）」「マジロク（瞬く）」「モドロク（斑く）」「カカヤク（輝く）」「ササヤク（囁く）」などもオノマトペに分類している。日本語母語話者でも、現代日本語でも使われているこうした語が、擬音語・擬態語起源といわれれば驚くだろう。（そもそも西洋では、人間の言語自体が擬音語、擬態語を起源するという説が繰り返し唱えられている[4)]。本当に言語起源かどうかは意見が分かれるようだが、少なくとも人類の歴史で古代から擬音語、擬態語が存在したことは間違いない。その名残が現在使用される言語の中に内在していても、決して不思議ではないだろう。）

日本語にも英語にも、語感は残っているが通常擬音語・擬態語としてあまり意識されない語があるのである。ふつうこれらはオノマトペとして分類されていない。しかし、これらをその成り立ちから、もう一つのタイプのオノマトペとして認識すれば、日英のオノマトペに関する全体像が見えてきそうである。

日本語の擬音語・擬態語はそのままの音や形態が生々しく残っており、判別しやすい。これを整理しやすいように仮にオノマトペＡと名付けよう。一方、英語のオノマトペは動詞一語で表現されるのが普通であり、そのほとんどが様態動詞の中に「語感」として含まれているため判別しにくい。これを仮にオノマトペＢと名付けよう[5)]。そして日英両語には、割合の違いはあれオノマトペＡ、Ｂの両方が存在するのである。（英語における典型的なオノマトペＡとしては、bow-wow「ワンワン」、cuckoo「カッコウ（鳴き声）」、ka-ching「カチャン、カチン」、ticktock「カチカチ（時計の音）」などが挙げられる。これらは主に間投詞、名詞として用いられる。）

本節での議論は、以下のように表にまとめることができるだろう。

表２　オノマトペＡ、Ｂによる分類

	形態の違い	日英の実例	日英における割合
オノマトペＡ	音や形態が語に生々しく残っており、容易に判別できる。	（日）ほーほけきょー、がたがた、べったり、きらきら （英）cuckoo, bow-wow, ka-ching, ticktock	（日）多い （英）少ない
オノマトペＢ	語感として、語の中に含まれているため判別しにくい。	（日）吹く、轟く、騒ぐ、注ぐ （英）sizzle, crash, bang, chirp, whistle	（日）少ない （英）多い

表２のように英語では、オノマトペＢが豊富に存在すると考えれば、冒頭で書いたパルバース氏の発言「英語にもまた、日本語に負けないぐらい豊かな擬声語や擬態語などがあります」と述べた意図がはっきりとわかる。言葉を換えれば、人間に聞こえた自然の音をそのまま擬音語（擬態語）として多用しているのが日本語であり、いわば洗練した形で様態の動詞の中に多く残っているのが英語であると考えることができるだろう。

３．日本語のオノマトペが多い理由は、日本語の動詞が少ないからか

灰島かり（2005）は日英のオノマトペについて以下のように説明している。

> 日本語はオノマトペがとても豊富で、英語には約3000語あるのに対し、日本語には約12000語のオノマトペがあると言われています。日本語は英語に比べて動詞の数が少ないからでしょう。「笑う」を表す英語の動詞を見てみると、laugh＝声を出して笑う、smile＝微笑する、chuckle＝ほくそ笑む、giggle＝くすくす笑う、grin＝ニヤリとする、simper＝間が抜けた感じでニヤニヤする、guffaw＝ばか笑いをすると、たくさんあるのに比べ、日本語は「笑う」「ほほえむ」と動詞が限られています。その代わりに、「ゲラゲラ」「ケラケラ」「クスクス」「ニヤリ」「ニタニタ」「ヘラヘラ」「ガハハ」とたくさんのオノマトペがあってさまざまな笑いの様子を伝えることができます。（p.68を筆者がまとめたもの）

日本語の動詞が少ないから、擬音語・擬態語が多いのではないかと言う議論は他にもあるようだ。確かに両言語の単語を数えるとそういう結果になるのかもしれない。しかし、これは原因と結果を逆に考察しているように思われる。パルバース（2014）は以下のように述べている。

> ……動詞と連結させて縦横無尽に表現を紡ぎだせる擬態語という道具があれば、もともとの語彙の数がそんなにたくさんなくても、さまざまな行動や感情を表現することが可能だからです。（p.108）

つまり日本語の動詞が少ないために、日本語にオノマトペが多いわけではなく、自在に創作できる日本語のオノマトペがあるからこそ、日本語の動詞は少なくてもすむ、という見方が成立する。前節の考察からもわかるように、両言語のオノマトペは、英語では様態を表す動詞、日本語では副詞＋動詞で表現するのが一般的である。つまり日本語では副詞にほとんどの意味

内容が含まれている。そのため動詞の中にオノマトペが含有されている英語と比べると、日本語の動詞は数が少ないように見えるだけなのである。

4．日本語と英語のオノマトペに対する意識の違い

本節では、日本語で使用されるオノマトペ（＝オノマトペA）が印欧語では一般に幼児語と考えられていることを紹介したい。牧野（1996）は次のように述べている（なお、牧野の言う「模写語」とは擬音語、擬態語のことである。）

> 模写語の使えない日本語学習者は、コミュニケーションでの強力な武器を欠いていることになります。ただ、特に印欧語の母語話者は模写語を学習しにくい事情が一つあります。それは、日本語では模写語がかなり広範なジャンルで使われ、しかも大人が使っているのに対して、英語など印欧語では、ほとんどが大人（特に親）と幼児の間の会話とか、子ども同士に会話とか、子ども向けの童話の本に限られているということです。印欧語では、模写語は一種の幼児語（baby talk）なのです。印欧語を母語とする日本語の学習者で、レベルが高いのに、模写語を日本人のように使いきれない学習者を私はかなり知っていますが、おそらくそれは印欧語の模写語の持つ幼児性が心理的なブレーキになっているのではないかと思われます。（pp.142-3）

これは重要な指摘である。英語で使われるオノマトペAが幼児語であることから、日本語で多用されるオノマトペAも幼児語とみなされがちなのである。（ただし、英語でもオノマトペBは、幼児語ではなくさまざまな場面で使われる日常語である。）

5．日本語で擬音語、擬態語（オノマトペA）が重視される文化的、言語的背景

次に、日本語でなぜオノマトペAが重視、多用されるのかを考えてみよう。丸山（1986）は次のように述べている。

> それでは日本語は他の言語と比較してなぜ擬音語や擬態語が多いのであろうか。まず第一に考えられるのは日本人の自然の風物に対する受けとめ方の問題である。日本語で書かれた風物に対する随筆を読むと、「カッコウの鳴き声に心地よく目覚める」とか、「夏の風物詩として欠かせないセミの鳴き声が聞かれずさびしい」とかいう文章がいたるところにでてくる。秋になると手紙の書きだしでも「ひぐらしの声に、ようやく秋の訪れを覚えるこの頃……」と言うのが多い。……日本人だけが、自然を愛するわけではないが、日本人独特の自然愛、特に虫や小鳥の鳴き声に感謝し、じっと耳を傾ける気持ちが多種多様の擬音語や擬態語を生み出すことになるのである。（pp.103-4）

丸山は、特に日本人の自然愛に注目しているが、自然のままの素材を活かそうという日本人の感覚は、日本料理、日本庭園、陶芸など日本文化の至る所にみられるだろう。対比して想起されるのは、ソースや味つけを重視する西洋料理、シメトリや人工的な美しさを重視する西洋式庭園である。陶芸（美術、彫刻）においても、西洋ではシメトリによる洗練された美しさを

表現しようとする傾向があることに気付く。

こうした日本人の強い自然愛が、日本語において擬音語・擬態語（本稿の分類ではオノマトペA）が多い理由となっていると考えてもいいだろう。

さらに丸山は日本語に擬音語、擬態語が多い理由を言語の構造面から次のように説明している。

> ここで少し視点を変えて言語の構造面からみると日本語が擬音語や擬態語を生み出しやすいようになっているのも事実である。たとえば語根に「い」、「ん」、「っ」、「と」などを加えれば無数にできあがる。（p.104）

また、筧・田守（1993）は、日本語と英語の言語表現上の違いを次のように指摘している。

> ……いまここで問題になっているのは言語表現上の直接性／間接性、あるいは具体性／抽象性の対比である。通常日本語による表現は、上述のペアのうちの前者に傾き、それに対して英語は後者の方向をとると言ってよいであろう。（p.8）

この主張が正しいのであれば、オノマトペAは「直接性、具体性」の表れであり、オノマトペBは「間接性、抽象性」の表れと見ることができる。この傾向は、オノマトペにとどまらない。筆者は、『授業研究』第11号で、小説文において日本語では直接話法が、英語では間接話法が好まれることを論じているが、これも言語表現上、日本語が直接性、具体性を好む証拠とみなすことができるだろう。そして上記のような言語構造上、表現上の特質も日本語で擬音語、擬態語（＝オノマトペA）が多用されることに寄与していることは間違いない。

最後に本稿での議論を以下のように表にまとめたい。

表３　日本語と英語のオノマトペの比較

	定義	表現の仕方	オノマトペA・Bによる分類	用いられ方	文化的、言語的背景
オノマトペ（日本語）	擬音語と擬態語の両方を指す	副詞が基本。だが、擬態語は、動詞で表現することもある。	オノマトペAが圧倒的に多く、Bはわずかである。	児童小説から文学作品に至るまで多用されている。	自然、そのままの素材を愛する傾向。言語表現上、直接性、具体性を好む。また言語構造上、オノマトペが作りやすい。
オノマトペ（英語）	onomatopoeiaは、通常、擬音語のみを指す	様態の動詞一語。ただし間投詞、名詞として日本語のような表現方法もある。	オノマトペBがほとんどであるが、オノマトペAも使用される。	オノマトペAは、幼児語とみなされるが、オノマトペBはさまざまな文献で使用されている。	西洋全体として、人工的な美を好む傾向。言語表現上、間接性、抽象性を好む。

終わりに

陳（2007）は日本語学習におけるオノマトペの重要性を次のように述べている。

> オノマトペを使わないと、相手に自分の意思や考えを伝えられないとは言えないが、それをうまく使いこなせば、より日本人らしく日本語を表現することができるのではないかと思われる。（p.2）

これに関連して、筆者の個人的経験を紹介したい。本稿を執筆している最中に、ある記憶がふとよみがえった。10年以上前に筆者が『ヘレン・ケラー自伝』（新潮社）を訳していた時のことである。新潮社の社風なのだろう、筆者の訳語には数か月かけて厳重なチェックが入り、不十分な日本語や誤訳に対しては何度もバイリンガルの編集者からの指摘があり、書き直しを求められた。第９章で雪が降り積もる部分の描写があり、「刻々と雪が天の高みから、地上へと静かに穏やかに落ちてくる」という筆者の訳文について注文がついた。直訳調で日本語らしくないというのである。何度か書き直しをさせられた。最終的に「雪はしんしんと降り続く」という擬態語を使った訳文を提示したところ、やっと編集者からOKが出たのである。筆者としてはやや意外であった。訳文に文句をつけられるのはあまり気持ちがいいものではない。しかもどう直していいのかわからないのである。暗中模索、最後に、半ば思いつきで「しんしん」を使ったのだ。「しんしん」という擬態語は、雪の降る状態を英語のように説明的に表現しているわけではない。空から、いつ終わるともなく、静かに雪が降り続く「情感」を凝縮した語といえるだろう。このオノマトペの使用が日本語らしさにこだわる編集者を納得させたのである。日本の中で、日本語だけで生活していると気づきにくいが、日本語の擬音語、擬態語は「より日本人らしく日本語を表現する」のに大切な言葉なのだと、このエピソードを思い出し改めて納得したのだった。

本稿では、文化間の共通基盤に着目し、日英オノマトペの定義を整理、見直しを行い、オノマトペＡ、Ｂという新しい分類法を提唱した。これにより、日本語、英語両語における擬音語、擬態語の全体像がより明確に見えてきたように思う。今後、本論を深化させ、より体系的な研究ができればと考えている。今のところ筆者は、本センターの授業で使用した文学作品とその英訳を使って、日英のオノマトペＡ、Ｂの事例を調査し分析をする計画があるが、その調査結果については次の機会に譲りたい。

注

1）韓国語（朝鮮語）のオノマトペは日本語同様豊富にあるようだ。李（2001）は「韓国語のオノマトペの個数は、日本語よりもさらに多い」（p.25）と指摘している。

2）これらの規則性は絶対的なものではないことに注意したい。田守・スコウラップ（1999）は次のように述べている。「もちろんfl-で始まる語のうち、flab, fleck, flaccid, flatのように素早い動きとはまったく無関係な語が英語に多数存在するが、先に強調したように、音象徴に関して個々の音と意味の関係が絶対に規則的でなければならないとは主張していないので、当該の音象徴的意味をあらわさないようなこれらの語の存在にあまりとらわれる必要はない。」（p.141）

3）なおこうした英語のオノマトペを、通常、英語話者がオノマトペとして認識しているのかという問題が残る。「英語話者は通常これらの語をオノマトペとみなしていない。」（田守・スコウラップ（1999）p.141）、「でも、英語の母語話者たちがどれほど擬態語として理解して使っているかは疑問ですが……」（パルバース（2014）p.106）と否定的である。しかし、これは日本語の「吹く」を日本語母語話者が普通擬音語として認識していないのと同じである。単語の中に語感として含まれているオノマトペＢは、両言語とも母語話者によっては、普通認識されないと考えてよいだろう。

4）たとえば丸山（1986）など。

5）オノマトペと音表象語を比較する先行研究はあるが、本稿のようにオノマトペＡ、Ｂと分類したのは筆者が初めてのようである。

参考文献

陳志文（2007）「日本語教育におけるオノマトペの提出順序についての一提案―「2005年現代雑誌200万字言語調査語彙表」の考察から―」財団法人交流協会日台交流センター日台研究支援事業報告書

灰島かり（2005）『絵本翻訳教室へようこそ』研究社

Hamciuc, Monica（2009）「英語の音象徴と日本語の擬音語・擬態語の関係について―言葉の感覚を身に付ける―」『ポリグロシア』第16号、立命館アジア太平洋研究センター

Inose, Hiroko.（2008）“Translating Japanese onomatopoeia and mimetic words”. Translation and Research Project 1.

筧寿雄、田守育啓編（1993）『オノマトピア―擬音・擬態語の楽園―』勁草書房

李殷娥（2001）「日本語と韓国語オノマトペに関する対照研究」名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文

呂佳蓉（2004）「英語のオノマトペの象徴メカニズム」『言語科学論集』第10号、京都大学

牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学―文法を文化で切る―』アルク

丸山孝男（1986）「英語の擬音語・擬態語について―日本語との比較―」『明治大学教養論集』第187号

小倉慶郎（2013）「日英翻訳の問題点を考える―なぜ日本語小説の英訳では直接話法が間接話法に転換される場合があるのか―」『授業研究』第11号

小野修一編（1984）『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂書店

大野晋（1974）『日本語をさかのぼる』岩波書店

ロジャー・パルバース（2014）『驚くべき日本語』集英社

田守育啓、ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペ―形態と意味―』くろしお出版

山口仲美編（2003）『暮らしのことば　擬音・擬態語辞典』講談社

（おぐら　よしろう　大阪府立大学教授、本センター非常勤講師）